

濱崎 正規「シュムペーター体系の研究」

学位の種類 博士（経済学）

授与年月日 1995年3月25日

〔論文内容の要旨〕

1. 本論文の研究課題

資本主義体制を包括的文明過程として捉える J. A. シュムペーターの主要業績は、経済学を中心とし経済社会学および政治学に及ぶ資本主義の動態過程についての分析である。その学問的諸成果はスミス・マルクス・ウェーバーさらには同年者ケインズのそれらと比肩できるものであったことは周知のところであるが、死後半世紀近くを経過した現在でも、その大脈の全容把握は未だなお充分とは言い切れない。生誕百年前後を契機としてシュムペーター研究熱が内外学会とも再生したことは、現下の世界史的激動期にあり誠に時機を得たものと称し得よう。

濱崎氏本論文はそうした広大なシュムペーター体系のほぼ全視野を射程に入れ、その新境地を開いた独創性と開拓性について、各論毎に再確認し、それらを再解釈しつつ、その概念的諸枠組みをもって資本主義・社会主義両体制が抱え提起しつつある現代諸課題に改めて照射して考察を加え、シュムペーター体系が統一的社会科学の体系を有していたこと、その体系的概念枠組みの今日の評価と、それをういて現代諸課題を理解しその方向づけを得ることをねらいとしている。

濱崎氏本論文の編および章別構成は以下の通りである。

（はしがき）

第Ⅰ編序章 問題提起

1章 理論経済学の「科学論」

2章 経済法則とヴィジョン論

第Ⅱ編3章 シュムペーター「体系」の歴史的意義

4章 シュムペーター「体系」分析試論

5章 シュムペーターの「体制」論—「企業者」の「革新」論

6章 一般均衡理論の展開とシュムペーターの経済学

7章 シュムペーターの経済変動理論—経済構造の変革論のために

第Ⅲ編8章 シュムペーターの資本主義崩壊論—くずれ落ちる城壁

9章 シュムペーターの「社会主義」論—いわゆる過程論を中心に

第Ⅳ編10章 シュムペーターの経済社会学の体系—「帝国主義論」, 「社会階級論」

11章 「南北問題」, 「開発論」への視座—シュムペーター・モデルの適応論争

12章 「発展の人間学」の構築—「中山経済学」の再検討試論

（参考文献目録およびあとがき）

上記の濱崎論文にみる研究範囲の特徴的性格は、シュムペーター社会科学の体系に即して包括的であることがまず第一に上げられる。それはヴィジョン論を中心とした経済および社会科学の方法論、歴史哲学的視点に立つその「体系性」についての検討を全編の前提とし、ついで同体系にあって中心核とも位置づけられる経済理論（静態的均衡論および動態的変動論）と、両者を結

びつける企業者革新論の検討から出発し、その資本主義衰退・崩壊論と社会主義論、とりわけその体制過程論にみる今日的意義と性格、経済社会学としての体系を構成する「帝国主義論・社会階級論」に加えて「南北問題・開発論」への応用的視座などをも提供しつつ、自らのシュムペーター学に及ぶ「発展の人間学」を「中山経済学」への仮託を通じて結びとしている。

第二の特徴としては、全体のねらいがシュムペーター学説体系の全体像を一挙に俯瞰するよりは各構成要素をその後の学問的進歩・蓄積に照らして逐一検定し、それらがもつ創造性と開拓性およびそれらの影響力と展開性を検証しつつ、現代的課題・視点からの再構成と再評価が各部分で試みられていることである。

濱崎氏による本研究は、最近改めて脚光を浴びてきたシュムペーター「構想」もしくは「体系」の意義再認識とその展開という、シュムペーター研究テーマの内外における活況と呼応するものと言える。

各編とその章内容に立ち入り要約を行えば以下の通りである。

2. 本研究の内容

(1) 第Ⅰ編についての要約

濱崎論文は、社会科学および経済学の役割は歴史的現実がはらむ問題状況との対決にあるとする認識から出発する。理論はどのような解くべき課題が与えられ、どのように現実を解こうとしているのか、その解決力如何により可能性が開かれ有効性が増大するとの主張である（序章）。そこで求められる経済学の科学性はイデオロギーとの分別にあるとし、濱崎論文では、まずその科学性つまり客観性と価値判断との関係について、その排除・包摂各説が検討・考察され、理論は現実問題の解決を意図する限り何らかの意味で政策含意的すなわち価値内包的であることを免れないとする（A. スミシズ）説の提示後、科学者（の関心）と科学そのものとの分別を前提に、実証・応用・規範各経済学の区別という視点を明確にしつつ、理論と政策とを取り巻く現実の歴史的状況下において、討論・説得・検証・修正のプロセスによる科学者の選択収斂性・関連妥当性に客観性つまりは科学性が求められることが主張される（1章）。

ところでシュムペーターにあっては、経済分析をイデオロギーから守るために分析の契機性つまり研究の手筈となる分析以前にあっての認知活動であるヴィジョン論が展開され、研究途上にあって当初のヴィジョンに含まれていた価値評価的な意識形態をできるだけ切り離し、客観的な分析結果を得るために理論構成の有効性を保証する科学的モデル操作の方法が提唱された。

濱崎氏は、シュムペーター方法論のこうした手順を確認の上、「系統化」に際して入り込むイデオロギー分別の客観性をどう保証するかという R. L. ミーク、および理論の価値つまり有効性を左右するのは歴史的判断と同時代の社会的実践にどれだけ応え得るかであるとする M. ドップの各シュムペーター批判および論評を紹介し、それらを踏まえた上で戦後近代経済学が歩んできた諸経路への反省として、その数理系経済学のあり方における抽象化モデル重視の傾向を、数学的論理の齟齬への体裁を整える余り経済的事象の歴史的意義について無内容化に陥り、また対象の相互関係にみる先験的規定性整序を図る余り事象の内在的発展の論理を欠く無矛盾性のみが主張され勝ちになるとして強く批判している。

(2) 第Ⅱ編についての要約

つぎに同氏はシュムペーターに即し、体制把握とその動態分析にあって、体系的統一社会科学

の成立が不可欠であるという前提に立って、体系が背負うその歴史的意義と同方法論上の独自性もつ切れ味を確認（3・4章）する。その上で、シュムペーター動態過程の分析にあつてのキー・ファクターである企業者革新論が体制変革つまり発展の起動力であること（5章）を検討し、シュムペーター経済理論のいわば体系的論理構造を成す静態（6章）から動態へ展開する手法を辿り、経済分析としての最終的成果である経済変動、すなわち「理論的、歴史のおよび統計的」景気循環論がもつ論理的構造の解明（7章）に至って第Ⅱ編が構成される。

ここでの濱崎論文におけるシュムペーター研究に示された独自の見解は二つに要約される。一つは、一般に存するシュムペーター批判、すなわち静態・動態（飛び越し）二元論としての理解を退け、資本主義における合理性追求過程としての企業者という人間類型の開拓的行為にその社会創造的發展の、静態的純粹経済理論から動態的發展理論への展開における「エンジン」として位置付け、これら一連の連携された体系を「理論化された歴史概念」と性格付けることによって、濱崎氏は、シュムペーターの経済変動理論を単なる「均衡の限界概念」としてではなく旧結合様式の均衡状態から新のそれへの展開過程としての「存在概念」として定立されていることを指摘し、それが信用創造を媒介として、物価騰貴、利潤・利子の発生など経済発展にともなう一連の現象を説明することになり、客観的歴史性をもつ構造論と体制変革論に通ずることになると指摘する。

二つには、シュムペーター景気変動論に対する批判、循環と動的変動との間の原因的関連と結果的連関について論理的明晰さと体系的説明力を欠くという批判に対してである。これに対して濱崎氏は、各循環は歴史的個体であり、単にその時々存する異常性一低ストック・未利用プラント・失業労働を排除する過程ではないことをシュムペーターが指摘していることを掲げ、ポスト・ケインジアンおよび新古典派双方の循環的成長理論をその批判対象として入れているという解釈を基礎とし、循環と趨勢に対して循環と発展、そこでの技術革新の中軸的役割すなわち「革新の群生」と循環を梃子にした構造改革のあり方を提唱する。それが単に技術革新を中心とした資本主義の経済発展のメカニズムを解明するに留まらず、体制革新のあり方、今日にみる（旧）社会主義諸国における改革をはじめ構造不況下にある日本経済にとってもその克服方向を示唆するものとの視野から捉えなければならないと主張する。

(3) 第Ⅲ編についての要約

以上の第Ⅱ編がシュムペーター経済理論を対象とした考察であり、資本主義発展の理論として位置づければ、これに対して以下の第Ⅲ編以降は近年その復活が唱道されている経済社会学すなわち体制論が中心であり、同衰退の理論として位置づけられる。とりわけ8章は『資本主義・社会主義・民主主義（1942年初版、2版'47年、3版'50年）』が対象であり、1980年代から'90年代にかけて生じた「体制変革」を分析射程に取り込んで、シュムペーター体系の再確認・点検とその視座から「体制変革」の世界史的意味を汲み取ることが当面の目的となる。

濱崎氏は、シュムペーターが理解した資本主義が、アメリカ資本主義の生々しい発展力とヨーロッパ社会の衰退がその形成に預かったこと、同時にオーストリア・ドイツの学問的状況とりわけマルクスおよびウェーバーの社会科学からの影響とそれらへの共感を挙げ、3者の相対的位置関係を確認する。

シュムペーターは歴史が経済的動因によってのみ動かされる訳ではなく宗教、哲学、芸術、倫

理的理念および政治的意思つまり非経済的動因の役割やメカニズムの説明、社会的現実の個々人精神への反映などを上げている。濱崎氏はマルクスがそれらを無視したわけではなくそれらの興亡の経済学的諸条件を暴露したにすぎないとし三者一線上の位置を認定し、なおウェーバーの「理想型」には「歴史的事態が確認されないときは抽象性のみ陥る」としてその方法論の観点からシュムペーターが唱えている異議を指摘している。ついでシュムペーター資本主義の基本諸要件とマルクスとの対比を進め、社会構造の原理および社会変革の条件についての共通性と社会変動の原理の異質性、社会発展の諸段階についての共通・異質双方の特性が確認される。その上でシュムペーターが唱える「創造的破壊」における実行者としての企業者の役割と発展にともなう革新の日常業務化とその職能の無用化（独占組織の形成）が自らの擁護層を追い出し敵対者を増大させ、その要塞の城壁を崩壊させ無防備化させてしまう過程が論述される。

濱崎論文の9章ではシュムペーターの「社会主義」論が移行過程論を中心として論じられる。濱崎氏は人々が何を社会主義とするかは様々（プロテウス）であるとの断わりを入れ、ここでの主題であるシュムペーター社会主義、つまり彼が社会主義をどう考えていたかの考察に入る。氏の理解によれば、シュムペーターの社会主義は「商業社会」としての資本主義が高度に発展した結果として示される「新秩序資本主義」と称し得るもので、資本主義が発展し成熟する歴史過程の中で、新しい体制に変貌せざるを得ない社会をシュムペーターは「社会主義」と呼んだとする。それは資本主義が最高の段階に突入した一つの包括的な文明社会であり、経済の論理だけが作用するのではなく、その成功と豊かさの結果、社会・政治・文化が変化し自由な経済発展を次第に制約しやがてはそれ自身の体制を掘り崩していくことになる。濱崎氏はこうした社会主義を捉えるシュムペーター学説を敷衍し、社会の歴史的過程をとらえることは社会のあらゆる側面の変化を問題とすることであり、それは統一した原理の下で集束した「体系」性で捉えねばならないこと、「社会の歴史的進化の過程についてその全体像に接近しようとすればするほど、それは実証科学の限界を越えて漸次歴史哲学の領域に接近していく（大野忠男氏）」ことになり、シュムペーターが意図したことは資本主義の崩壊・社会主義への移行という帰結命題そのものではなく、マルクスの壮大な歴史社会の分析史観に代わる史観を構築することをねらいとしたこと、その観点からシュムペーター診断「資本主義は社会主義へ向かうとする」は再度問い直される必要があり、それには常に旧構造を破壊し新たなシステムを創造構築する進化論的視点で臨むことの必要が結論とされる。

(4) 第IV編についての要約

この編では以上の体制論を基礎に、経済社会学の体系を構成する「帝国主義論」・「社会階級論」が考察され（10章）、ついでそのいわば応用分野とし「南北問題・開発論」へのシュムペーター・モデルを巡る適応論争が中心的に検討（11章）されて後、最終12章において「中山経済学」に仮託した濱崎氏「シュムペーター学」の結論「発展の人間学」が構想され、全編が締め括られる。

ここで『帝国主義と社会階級（1951）』論を取り上げた著者の意図はシュムペーター体系にあって無視されてきた裏面・背面を取り込み、それを新たな構成要素として加えた社会科学の総合的かつ立体的な枠組み構築を模索することにある。それはマルクスとは異なる歴史・社会変化の全過程における階級の役割・階級形成の原理を得ることであり、とくに指導者層の形成、少数の

人が一時期に持つ社会的指導力—決定力、指揮力、目的達成力、前進能力を持つ層としての支配階級の構成とその役割を説くことであり、そうした指導者層は世代間での浮沈という垂直的変動性を伴いつつ「企業者」概念と連結するとの解釈を行っている。

一方「帝国主義論（1919）」についてはどうであろうか。シュムペーターのそこでの帝国主義は必ずしも資本主義と結びつかない。それは無目的な国家の武力による拡張への傾向、すなわち戦争や征服を求める武力階級が、心理的かつ生命保存的機能をもつ社会的構造として確立し、支配階級の国内政治上の利害関係や好戦的性向ならびに戦争政策によって経済的・社会的利益を受ける人々の利害を体して行われる侵略的行為を指している。シュムペーターはその後この意見を（資本主義経済に固有で独自のそれに）修正したか否かで、スウィージー・O. H. テイラー・伊東光晴氏の間で諸説が展開されていることを紹介した上で、濱崎氏は以下のような検討を加える。

それは、シュムペーターの帝国主義と社会階級論が「経済学と社会学」の概念枠組で「マルクス対シュムペーター」または「歴史の経済的解釈と異なる歴史認識論」を対比させ、他の主要な著作と密接に関連した経済学と社会学の理論を共に備えたシュムペーター体系が確実に存在することについての認識である。

ついで濱崎氏は現存資本主義にみる幾つかのタイプ（個人主義のアングロ・サクソン、ドイツ経営共同体、日本各型）がどのように生成したか、そのまま存続するのか、（旧）社会主義国はどのような市場経済を志向しているのか、アジア開発型はどのような特徴を示すかなどの問いを設定しつつ、私有財産制、市場システム、信用制度そして企業者精神など、経済社会システムの基本的枠組みから組み立てられているシュムペーター・モデルは現在進行している体制移行、取り分け「南北問題・開発論」の性格とこれからの方向・あり方を検討するのに格好の枠組みを提供していることを指摘する（11章）。

氏は、こうした「南北問題・開発論」にシュムペーター・モデルの幅広い適応可能性・不可能性を示唆・言及した、P. S. ローマス、プレビッシュ、H. ミント、R. ヌルクセなどの諸説を紹介した上でそのうち最も系統的な論争を展開したと見做される、H. C. ウォリクの「誘導発展理論」と、D. リムマー、H. W. シンガー、A. ボンネ、H. G. オーブレイおよびP. S. ローマスが参加した論争を取り上げる。

ウォリク「誘導発展理論」の結論は富や力の樹立を目標とした企業者の革新発展論を中軸とするシュムペーター・モデルは途上国には適応しないとするものである。その根拠としてウォリクは途上国には革新的企業者による自生的内発的發展を期待するには制約・障害が多大であり過ぎることを上げ、むしろ一般の生活水準向上という大衆の要求を見通した社会的国家的ならびに民族主義的立場に立った政府の誘導的かつ政府自らがそこで革新者としての役割を果たし、企業の革新力を誘導・誘発する方（革新的活動の社会的創造）が重要であると主張する。

こうしたウォリク説に対して濱崎氏は、以下のような反論を対比させる。

すなわち、革新活動における政府と私的なそれに根本的な相違はなく単に機構形式だけの問題であること、企業者性格で途上国であるからといって特別な差異を設定する必要はないこと、ウォリク説は理論的方法の静態・動態と実践的立場・要請に基づく停滞・発展とを混同していること、自生的か導入か技術革新の性格に相違はないなどの反論がそれらである。

最終12章「発展の人間学の構築」は濱崎氏「シュムペーター学」のいわば総括であり、氏によ

ってシュムペーター研究が今後継続されるとすればその再スタートの出発点と位置づけられるものである。「発展の人間学」と題されかつ「中山経済学」の再検討試論と副題され、濱崎氏が仮託した中山博士絶筆（『発展の理論』新訳版「解説」）の構成は、(1)シュムペーター一人と学説、(2)静態と動態の問題、(3)発展の人間学、(4)ケインズとシュムペーター、(5)マルクスとシュムペーター、から成っており、同博士が『発展の理論』を「発展の人間学」に通じた位置づけをしていたこと、博士がシュムペーターの巨きな学問体系を総合的に評価し、その真髄として上の構成が博士の結論であると濱崎氏は解釈する。すなわち、発展の原動力は革新にあり、革新の機能を担う主体としての人間の存在についての研究は個別科学の狭い領域ではとり扱うことができず、むしろ社会科学の一般理論の構想へと導かれ、「社会科学の将来に対して新しいモデルを示した」のがほかならぬシュムペーターの学問である、という解釈（『中山伊知郎全集』編集委員会）である。氏はその解釈と同じ立場に立ち、その上で、慣行に抗して新たな動態を求め、不調和は進歩の要因のはたらき方そのものに固有なものであり、発展する状況の本質的な要素であると捉え、「発展の人間学」はそれを担う革新者＝企業者を直接の研究対象とするとともに、それがもたらす均衡の枠内部の運動に留まらず均衡の破壊すなわち経済システム全体の転換・刷新と社会のあらゆる側面の変化・進歩を総合的に、歴史哲学的な構造認識論に立脚しつつ把握するのがシュムペーターの体系であり、そうした体系の構築がこれからの社会科学の目指すべき方向である、とし、それを自らの結論としている。

〔論文審査の結果の要旨〕

3. 本論文についての審査

まず本論文全体のねらいと評価に関わって、わが国にあってシュムペーター研究書は現在数多くを数えるがシュムペーター体系を確認しつつそれにあらたな解釈を施し意味理解を図りつつ再構成の上、それをもって現代的諸課題に迫るという問題意識・問題提起になるものは殆ど皆無といてよい。これも同氏が、「社会科学および経済学の役割は歴史的現実がはらむ問題状況との対決にある」という、あるべき学問観を抱き、シュムペーターと同じくそれを起点とし、またそこを基点として立ち返るという想念でもって初めて可能となる提起であり、下記本論文の各内容での評価に先立ち、前以て特筆されるべきことであろう。

濱崎氏叙述の順序に従い、以下、先ず経済学に関しての方法論から順次本論文の到着点についての評価を行うこととする。

(1) シュムペーター体系はその科学論、それも歴史哲学的視点によって基礎づけられている。氏は現代経済学の危機とその要因を同科学論でもって語らしめており、その歴史哲学的視点の欠落が現実問題との距離を益々遠ざけ、経済メカニズムについての総合的かつ内在的発展の論理を失わしめることに連なっていることを的確に指摘している。けだし、経済学が関連社会諸科学とともに総合的体系化にそれらの基礎として参加し得る資格と、参加して得られる相互関連性の共通項は歴史性にこそ求められると考えられるからである。

(2) 氏の、現代経済学について生じている危機意識はこの歴史性の欠如にあるという指摘は本論文全体を通じて一貫しており、その危機からの脱出もその回復にあるとする主張は今日の激動する世界の状況に照らして、その有効性を取り戻すためには的確かつ時宜を得たものと評価し得

よう。

しかし一方では、その実現方途は容易ならざるものがあるとして、

(3) 社会科学としての総合性・普遍性が追求されればされるほど、歴史の理論的研究ではなく理論の歴史的説明という、理論分析と歴史分析そのものに論理的に伏在する溝がシュムペーター体系にあっても免れ得ていないという、分析科学における基本認識に関しての根本的かつ宿命的限界も鋭く指摘しており、氏は体系化にともなう道筋の困難性をあらためて確認し、それを出発点としている。このことは、理論と政策との関係に介在する価値判断問題についての科学的処理について、シュムペーター以後における知識社会学としての見地に立つ提案—科学者の選択収斂性および関連妥当性—とともに高く評価されるところである。

(4) つぎに特筆されるべきことは、シュムペーター経済理論の静態・動態二元論についてであり、関連研究者が常にその解釈に腐心するとともに評価が分かれるところの氏の独自の扱いである。既述のように氏は静態の純粋経済理論としての均衡論から動態的發展理論たる不均衡理論への展開としてその原動力を企業者精神による革新的行為に求めその社会創造的開拓への役割を含めて、それを「理論化された歴史概念」として性格づけし、両者の橋渡し・接合を行った。

(5) それも氏によるワルラス均衡論とシュムペーター均衡論の対比的な理解、前者の「限界概念」に対して後者が「(歴史的)存在概念」であるという両者について特徴ある性格区別に立脚したことにより引き出し得た接合であり、シュムペーター「二元論」との批判を克服し得た理解・解釈と称し得よう。

(6) さらに、シュムペーター景気変動論に対する批判についての再反論は既に述べたところである。すなわち、循環運動をポスト・ケインジアンおよび新古典派の様な水平軸もしくは平面的視野を基準とした次元からの解釈を廃し、均衡近傍間の経済変動という大方のシュムペーターによる解釈に即しつつも、濱崎氏は各循環は歴史的個体として性格づけられるものであるとし、景気政策は単なる異常性(需給ギャップ)除去と趨勢的成長への復帰に留めることであってはならず常に革新を梃子とした構造改革としてのあり方が求められると主張する。

(7) シュムペーター経済変動論が他理論と際立つ異彩と特徴を示すのはその社会化過程についての把握である。革新的企業者の占める社会階層にあっての成功者・指導者としての位置づけ、ならびにさらなる進展がその革新的機能を企業者から奪い、それにとりもなう社会変動は資本主義そのものを揺るがすに至る。濱崎氏はこのシュムペーター社会変動論に即して、単に資本主義の体制枠組み内でのそれとしての理解枠を超え、体制変革を含む視点からそれを捉えることによって、経済学中心のⅡ編から体制論つまり途上国開発論を含む経済社会学あるいは総合的社会科学の体系へ展開するⅢおよびⅣ編への視野と展望を齟齬なく引き出すことに成功している。

(8) こうした総合的社会観を提供する社会学者はマルクスおよびウェーバーである。したがってシュムペーターは「シュムペーターとマルクス」あるいは「シュムペーターとウェーバー」とを対比し、相互の表面で類似し、内面で異質なあるいは逆に表面で異質ながら内面で共通な学問的性格についての吟味・検討を行ってきた。濱崎氏本論文ではそれら2者比較に留まらず、3者の位置を一挙に認定するという独自の試みに着手している。

氏の3者比較についての結論だけを手短かに再述すれば以下の如くである。

歴史性(表面)では3者は一線に並ぶ。しかし内面では様々な態様である。先ずマルクスとシ

シュムペーターとは歴史の動因として経済を考えることでは共通であるが、マルクスが歴史の経済的解釈を一貫させるのに対してシュムペーターはこれを拒否し非経済要因の歴史動因をウェーバーとともに認める。しかしシュムペーターはウェーバーの「理想・理念型」を歴史の実態をとまなわない抽象性に陥るとしてこれを受容しない（シュムペーターにとって受容できる限界は「類型化」までである）。とすると3者のなかでシュムペーターの相対的位置・特徴が明確に浮かび上がってくる訳で、それは多元的歴史観であり、合理的（発展の）歴史観である。こうしたシュムペーターの位置づけをマルクスおよびウェーバーとの対比で得るという試みは氏の幅広い学識と総合的社会科学の構築を求めるという止みがたい学問的情熱に起因し可能としたと高く評価されるところである。

(9) シュムペーターの歴史観をこのように特徴づけることによって濱崎氏は、シュムペーターが資本主義および社会主義両体制それぞれについて多様な形態「プロテウス」を想定していたことを論証する。シュムペーター概念によれば「商業社会」はその一特殊形態としての資本主義体制を包摂するが、その資本主義が発達して最高の段階に突入した結果としてもたらされる社会主義こそが経済社会システムとして有効に作動する条件を兼ね備えていることになる。一方、高度に発達した資本主義は結果としてそれ自身を掘り崩すことになるかもしれないが、氏によれば、シュムペーター発展の歴史観では旧たる現構造を破壊し、新たなシステムを創造・構築する視点でことに臨まなければならないことが主張されていると解釈される。こうしたシュムペーター発展の歴史観に基づく氏の体制改革の視点は現下の両体制ともに迫られている変革の方向を探る上で貴重な観点を提示しており、下記に述べることと合わせて高く評価されるところである。

(10) 濱崎氏は、前述のスイジエならびに現在では大方のシュムペーターリアンに共通した理解、経済社会学の体系は進化過程論であるべしというそれに沿い、『発展の理論』と『帝国主義と社会階級』を（資本主義としての経済社会システムの）生成・発展の過程とし、『資本主義・社会主義・民主主義』をその成熟・衰退の過程として位置づける。こうした解釈はシュムペーター「体系」の理解を一段と前進させることに連なっている。

(11) もとよりシュムペーターはその著作でみずからの社会科学体系を明示的に展開している訳ではない。後年の研究者達はその諸著作の相互の位置づけおよび各著作内容における関連性を、そのなかに断片的に垣間見る思想を整理し、それらを組み立て構築し直してみると、そこに一種壮大な、総合的な社会科学体系としての輪郭が浮かび上がってきたこと、未だ明確な姿として描き切れていないにしても、それはスミス・マルクス・ウェーバーの、および現在あたかも軌を一つに並行して作業が進められているケインズ思想の体系化とそれにより新たに浮かび上がってきたその全体像の輪郭あるいは姿と各比肩される規模と内容を有することが判明しつつある。いわゆる「シュムペーター構想」がこれである。シュムペーターが直接その体系を明示していない限りそれとして形成される社会科学体系は各研究者による各様々なそれらがあり得ることになる。スミスの、マルクスの、かつウェーバーのそれら社会科学体系と同様にシュムペーター体系についてもその内容は研究者がそれをどう構築・構想するか如何に依存することになる。

(12) 濱崎氏本論文におけるシュムペーター体系についても、その掲げているねらいからすれば、氏の構想になる総合的社会科学の構成元からシュムペーター各著作内容が系統づけられ、それによって構成された「シュムペーター構想」についての俯瞰があれば氏によるシュムペーター体系

についての大方の理解が一段と明確化したであろうことが指摘できよう。

(13) 逆に、氏のシュムペーター体系による今日的諸課題解明にあつては、現代史を世界的視野から俯瞰してのそれが中心である。経済社会の発展を総合的に理解するためにはそれが不可欠であり、その視点が本論文のなかでもっとも効果的に発揮されるのは途上国開発論におけるそれである。再言は省くが「誘導開発論」への批判とそこでの企業者革新論の位置づけと展開は現下のアジア開発型をはじめ途上各国それぞれの行く末を指し示すだけに留まらない。シュムペーター・モデルに依拠して、社会文化の環境のなかに人間の存在傾向なども含み企業者革新をあらためてその中核に据えるという構図は、現存各国資本主義および(旧)社会主義諸国の今後における経済社会システムを組み立てる基本的枠組みを示し得ているといわなければならない。

(14) そうした氏の基本的枠組みは「中山経済学」への仮託という姿をとってはいるものの、学問的関心のみに留まらず、革新者たる企業者の今後のあり方「発展の人間学」を示唆するという実践的意義と役割を担っていると判断されよう。

(15) いずれにしても濱崎氏本論文は、そうしたシュムペーター理解の今日的な課題、その体系性を確認・把握して現代諸課題を解明するという要請に真正面から取り組み、それを基点とし内容面で一貫させた著作である。現代の経済学がその研究領域を個別化させ、細目化し、その精緻化が進む一方で自らの社会科学としての位置づけを見失いつつある傾向の強いなかで、今後そこからの脱出口を見出し、さらにその発展を意図する限り、このような総合的社会科学の構築・構成という骨太い視座からする分析の意義はそれを先駆的に指し示し得て極めて大きいといわざるを得ない(とくにシュムペーター研究の現況が内外共、その「技術革新論」に傾斜しすぎている傾向が強いことを顧みるとき。それはそれでシュムペーター研究の核心であり、現経済体制における基本問題として最も重要な研究課題であることは否定し難いとしても)。

(16) 冒頭に記したように総数400頁を越える本論文はそうした新たな視点・視座から旧稿を改訂したものである。今回旧稿それぞれについての言及は省略するが、濱崎氏シュムペーター研究はわが国における同研究史上において先駆的な位置づけがされており、旧著『シュムペーター経済学の基本問題(1955)』は単独の著書として書名に「シュムペーター」を冠した著作としてわが国最初のものであることが金指基氏より指摘されている。その論じられている内容についても上記したあらためての今日的な研究課題を予知したかのように、その社会科学としての総合性・体系性に着眼し、単に純粋理論に留まらず、ヴィジョン論さらには帝国主義論、社会階級論にまで及んでいる。さらに付記すれば、同著をはじめ、これまで同氏による旧諸稿はその後わが国における数多く出版・刊行されたシュムペーター研究書・諸論文で引用されてきたばかりでなく、海外において編纂・刊行されたシュムペーター著作・研究文献目録である下記二書、

① M. I. Stevenson, J. A. Schumpeter, A Bibliography, 1905-1984 (Greenwood Press, 1985).

② M. M. Augello, J. A. Schumpeter: A Reference (Springer-Verlag, 1990).

において、①で2点、②で3点がリスト・アップされていることを欄筆しておきたい。

〔審査委員会の結論〕

本論文の審査委員会は、以上のような検討と評価を行った結果、本論文が、立命館大学学位規程第5条第2項に規程する博士の学位を授与するに値するとの結論に至った。

審査委員	経済学部教授(主査)	鈴木 登
	経済学部教授	甲賀 光秀
	経済学部教授	上野 俊樹